



TITLE:

【学会記事】バンジャマン・コリア教授特別講演会

AUTHOR(S):

八木, 紀一郎

CITATION:

八木, 紀一郎. 【学会記事】バンジャマン・コリア教授特別講演会. 経済論叢 1992, 150(5-6): 123-123

ISSUE DATE:

1992-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/44870>

RIGHT:

經濟論叢

第150巻 第5・6号

スコットランド啓蒙における商業と軍事……………	田 中 秀 夫	1
サバ、サラワクの木材産業の持続的発展の 見通しについて……………	中 島 健 二	25
ローカル・ミニマム論の検討 (2)……………	李 昌 均	49
商人と一次産品の価格決定……………	服 部 茂 幸	71
アジア NIEs 工業化過程の 政治経済学研究 (1)……………	宋 立 水	88
書 評		
中村達也『豊かさの孤独』 (岩波書店、1992年)……………	根 井 雅 弘	115

学 会 記 事

經濟論叢 第149巻・第150巻 総目録

平成4年11・12月

京 都 大 学 經 済 学 會

【学会記事】

ベネディクト・レイノー博士特別講演会

1992年5月1日午後、経済学部特別講義室で、パリ国立科学研究所研究員／ポリテクニク講師のベネディクト・レイノー博士 (Dr. Benedicte Raynaud) が講演をおこなった。彼女はフランスにおける労使関係研究者の新鋭の一人で、最近は賃金制度や技術進歩について研究している。講演のタイトルは「1990年代のフランスの賃金形態はどうなるか?—レギュレーション・アプローチ—」であった。

彼女は、まず、雇用者にとって実際に実現される労働の強度は未知の変数であり、賃金形態が雇用者・被雇用者の双方にとっての参照基準となることから、賃金形態をレギュレーション学派のいう「賃労働関係」を構成するノルムの一つとして位置づけた。そのうえで、35万人の労働者のデータを用いて、賃金の諸形態と制度的・経済的・技術的特性との関連についておこなった分析をもとに、フランスの賃労働関係の5つの形態を抽出した。さらに新しい傾向としてあらわれている賃金決定の「個人化」を分析して、それがテラー主義タイプの競争賃金への復帰ではないと論じた。最後に、賃金政策のミクロ経済学的検討をおこなって、賃金（の一部）を保証されたものではなくリバーシブルなものにするという戦略と、逆に賃金を労働者に対する期待に依存させるという戦略を比較した。

討論のなかでは、フランスの労使関係の発展の具体的問題もとりあげられ、賃金の「個人化」といった新しい動向に対して、組織力の低下した労働組合の対応が遅れていることも議論された。

(八木紀一郎)

バンジャマン・コリア教授特別講演会

バンジャマン・コリア教授 (Prof. Benjamin Coriat: パリX大学) は、数年前に本学に滞在して、日本にレギュラシオン学派の理論を伝える草分けとなった人であるが、1992年11月18日、本学を再訪されて講演会をおこなった。

演題は「賃労働関係と企業内民主主義—最新の動向についての考察—」というもので、その内容は、最近のヨーロッパ、ことにフランスでの労働者参加型の管理の実験と普及のなかに、企業内労使関係の新たな展開の諸傾向を読みとり、企業内民主主義の確立の方向にガイドすべきだと論じたものであった。

討論の部では、コリア教授が1991年に刊行し、翌年に日本語訳が刊行されたトヨティズムあるいはオオノイズムについての研究 (邦訳名『逆転の思考』藤原書店) も、当然議論された。その際、コリア教授のいうような「企業内民主主義」の方向は、1970年代における自主管理社会主義の思想の延長と考えてよいのかという質問が出た。コリア教授は、しばらく答に窮した後に、そうではないと否定的な回答をした。この学会記事の筆者の感想は、コリア教授はこの否定 (ノン) によって、ミッテラン革新政権10年の幻滅のあとでは、レギュラシオニストのいう勤労者民主制をめぐる議論も、フランス産業の再生と現代化というコンテクストのなかにしかありえないといおうとしたのではないかということである。

(八木紀一郎)